

研究紀要

# くらしをひらく子ども

—— 個性豊かに自己を表現する姿を求めて（3年次） ——

1997

島根大学教育学部附属小学校

## くらしをひらく子どもの育成を願って

### — 序にかえて —

今年の3月末のある放課後、体育館の木の床にあるバレーボール用のネットを張るポールを入れる穴の位置がずれており、体育館の木の床をのこぎりで切り、のみで削る作業をしていた時のことである。部活動を終えた子どもたち多数が、体育館では、物珍しいゴリゴリ、トントンという物音と、作業着姿の妙な見慣れない私をいつの間にか取り囲んでいた。「あれ、校長先生じゃないの」、「校長先生、何しているの」、「この道具は何に使うの」、「アッ、この道具、家にもあるよ」、「この道具、お父さんが使っていたよ」と子どもたちの質問とどよめきの渦になった。大工道具の形や機能、大工道具を使う動作、使い方など、現代の子どもにとって日曜大工は非日常的な作業になってしまったのだろうか。意外にも子どもの興味の好対象物となってしまった。

人が仕事や作業をしている姿は、子どもたちの興味と関心を引き起こさせるものである。また、会話のし易い場を形成するものである。昔の通学路や地域社会にはいろいろなお店や仕事場があり、そこで仕事をしている人々の姿や仕事の道具、仕事の内容を見ながら、ある時にはお店の人や職人さんたちと「何を作っているの」と話かけたり、会話を楽しんだり、時として「危ないぞ」としかられたりしていた。

このような身近に仕事場がある社会環境には、本校で願う「くらしをひらく子ども」を側面的に育成する場が存在している。生活に密着した学習の一側面として捉えることができようか。モノを作る材料や道具を見る。モノを作っている人の姿を見る。また、自分でモノを作ってみる。こんなことが子どもの視野を広くし、学習の興味づけの背景となる。そして、疑問をもち、自分で考え、仮説を立てて挑戦し、行動する。また、友だちと考え合い、助け合い、協力し合い、みんなで完成の成就感を共有し合うのである。

この研究紀要には、こうした「くらしをひらく子ども」の姿を実現するための実践研究の足跡が記されている。授業の対象となる子どもたちは、日々刻々と変化し、同じ授業実践を二度と再現できないと言っても過言ではない。この変化に柔軟に対応した授業実践に、多少なりとも貢献できることを願っている。

平成9年6月12日

学校長 山下晃功

# 目 次

序にかえて	学校長 山下 晃 功	
I 暮らしをひらく子ども		1
ー 個性豊かに自己を表現する姿を求めて (3年次) ー		
II 教科における授業の構想と実践		
国語科 表現の価値を追求する国語科学習		7
ー 言葉の再自覚化を図る活動のあり方をさぐる ー		
社会科 子どもが自分との関わりで社会事象にせまっていく学習		19
算数科 数理を追求する楽しさを感じる学習		31
理科 子どもが自ら自然を探求していく理科学習		48
ー 子ども一人ひとりの見方や考え方が生きるために ー		
生活科 子どものくらしが広がる生活科の学習		65
ー 思いや願いをもち、活動に没頭する姿を求めて ー		
音楽科 子どもが感じたことを豊かに表現していく学習		72
ー 一人ひとりの創造力を高めていくために ー		
図工科 子どもが自らの表し方のよさに気づく学習		84
家庭科 子どもが自らのくらしを豊かにつくっていく学習		96
体育科 子どもが楽しさを追求する体育学習		103
特殊教育 子どもが楽しむ学校生活		120
ー 主体的な活動を引き出す教師の関わり(個別の指導計画をもとに) ー		
保健 実態をとらえて活動する児童保健委員会		142
おわりに	副校長 佐貫 泰 則	
研究同人		

# I 総論

## くらしをひらく子ども

— 個性豊かに自己を表現する姿を求めて（3年次） —



「ハイ」 5年 石倉 味 歩

## Ⅱ 教科における授業の構想と実践



「とりさんが あんしんしてくれますように」

2年 高森 真

## お わ り に

本校では、これまで一貫して「子どもは生まれながらにして追求する存在であり、開かれた存在である」という教育観、子ども観を基本にして、子どもの内なる可能性を引き出し、主体的に考え行動する子どもの育成をめざし、学校生活の全領域を通して実践的研究を進めてきました。平成8年度は、主題「くらしをひらく子ども」のもと、サブテーマ「個性豊かに自己を表現する姿を求めて」の3年次をむかえ、「一人ひとりの子どもたちが楽しく生き生きと学習に参加し、さらに、学習したことを一人ひとりが個性的に自己表現できる子どもに育てほしい」と願い、授業実践をふまえた研究を積み重ねてきました。「自己を表現する」といっても、教科によってその表現する方法は異なるだろうとの共通理解のもとに、主体的に追求していく過程で豊かな表現力を育てていく授業を構想するためには、総論で述べているように「めあての工夫」、「まかせること」と「提案すること」、「わかり合う学習活動」などに研究視点をおいて取り組みました。子どもたちは、このような取り組みの中から、豊かに自己を表現する力を身につけてきたように思います。

2年「時刻と時間」の学習のときのことです。『今、9時15分です。30分前は、何時何分でしょう。』この課題に対して、子どもたちは時計を操作しながら一生懸命考え、①8時45分 ②9時45分 ③はっきりしない など自分なりの考えをもちました。そして、模型の大時計を使って自分の考えを発表しました。「長い針を5、10、15、20、25、30と数えて針をもどしていくと8時45分になります。」「長い針を10、20、30と数えて針をもどしていくと8時45分になります。」「もし、30分後だとすると、長い針を5、10、15、20、25、30と前に進めることになります。今は、30分前だから長い針を5、10、15、20、25、30ともどします。」子どもたちは、自分なりに針の動かし方を考え、分かりやすく発表しました。30分前の「前」をどう考えたらよいかと考えあぐねていた子どもも友達の発表をよく聞いて、「分かった、分かった。30分前だからもどせばいいんだね。」とつぶやいていました。これで終わっておれば、「できた」「分かった」で平板な授業になっていたことでしょうか。ところが、考えあぐねていたA子が、「そうか、みんなからいい言葉を教えてもらったよ。それはね、『前』の場合は針をもどす、かえすということで、『後』の場合は、長い針を進ませる。こんな言葉を使うと分かりやすいよね。」とコペルニクスの発想の転換を図る発言をしました。この発言をきっかけにして、『今、9時15分です。30分後は、何時何分でしょう。』という新しい問題をつくり、自分たちで学習を進めました。このように、子どもたちは、納得してより確かな、より豊かな考えをもつことができました。と同時に、理解できた喜びや充実感を味わうことができたと思われまます。このような学習を体験することが、豊かに自己を表現する力になると確信します。

サブテーマ「個性豊かに自己を表現する姿を求めて」のもとでのここ3年間の研究を通して、子どもが変容した姿を列挙すると次のようなことです。①自分の考えをもち、書いたり発表したりして確かめていこうとする姿が見られる。②既習事項を生かし、調査したり質問したりして納得してわかろうとする姿が見られる。③自分で問題をつくり、ひとりで、あるいは友だちと楽しく学習する姿が見られる。しかし、さらに豊かな表現力を育てていくための課題として、わかり合う構えを育てること、つまり共感的に理解し合うことが不可欠であると共通理解したところです。

平成9年度は、これまでの実践研究をふまえながら、「自ら人との関わりを豊かにしていく授業」をサブテーマとして掲げ、子ども自らの思いや願いの実現に向けて、「教育課程の改善」と「自ら人と関わり、生き生きと追求していく学習の創造」をめざし、研究をスタートしたところです。今回の研究発表協議会では、その一端を提案いたします。ご参加いただきました先生方と話し合う中で、ご意見、ご批評をいただき、本研究をさらに深めていきたいと願っております。

# 研究同人

(平成8年度・9年度)

学校長	山下 晃 功	
副校長	佐貫 泰 則	
教 頭	岡田 正 樹	
研修部長	赤木 直 行	和 泉 浩 行(平成9年度)
<b>国 語</b>	瀧 哲 朗 金山 剛 志	昌 子 佳 広
<b>社 会</b>	赤木 直 行 吉 崎 朗	奥 村 忠 孝
<b>算 数</b>	山崎 敦 史 立石 浩	原 一 夫
<b>理 科</b>	和泉 浩 行 原 啓一朗	高 橋 泰 道
<b>生 活</b>	中筋 幸 夫 奥村 忠 孝 立石 浩(平成9年度) 金山 剛 志(平成9年度)	陶山 弘 志 瀧 哲 朗 松 浦 尚 美
<b>音 楽</b>	岡田 正 樹 高橋 千 晴	中 村 治 子
<b>図 工</b>	陶山 弘 志 大野 寛 人(平成9年度)	金 築 亨
<b>家 庭</b>	平井 早 苗	常 松 ゆう子(平成9年度)
<b>体 育</b>	中筋 幸 夫 松浦 尚 美	藏 敷 真 吾
<b>特 殊</b>	西島 博 天野 千 里	奈良井 正 山 本 勉
<b>保 健</b>	原 田 睦 子	倉 石 美津子(平成9年度)

この研究紀要に収録されている授業記録は、次のような約束にもとづいて記載されています。

↓ 複式学級の下学年を表す  
60 C<sub>2</sub> C : 児童 T : 教師  
↑ ↑ 児童を表す番号  
その時間の発言の通し番号

---

平成9年6月12日 印刷

平成9年6月12日 発行

発行所 島根大学教育学部附属小学校  
〒690 松江市大輪町416-4 (TEL 21-2471)

印刷所 黒潮社  
松江市向島町182-3 (TEL 21-3409)

---